

パラドックスは解けたのか？

神田龍身著『偽装の言説——平安朝のエクリチュール』

深 沢 徹

物語文学というジャンルは、物語であるにもかかわらず書かれたテキストとして、また書かれたテキストであるにもかかわらず無署名の仮名書きテキストとして存在している（P7）。冒頭の一文において二度繰り返し返される、この「にもかかわらず」（傍点引用者）という言葉が、奇妙なパラドックスを浮かび上がらせる。「書かれたテキスト」と「口承の物語」とは、水と油の関係にある。また「書かれたテキスト」には、それを書いた筆者が必ずいるはずだ。なのに「無署名」なのはなぜなのか。本書は、この奇妙なパラドックスに徹頭徹尾こたわり、このパラドックスを解き明かすことにひたすら専念する。

パラドックスを解く「鍵」は、テキストの内部に仕組まれた「偽装」のメカニズムにある。そのメカニズムを説明すれば、パラドックスは解ける。神田は、そのメカニズムのからくりを説明して次のようにいう。

口承物語の世界から何とか脱出しようとしているのではなく、自らが作者により机上で創作された書き物以外でないにも

かわらず、そのことを隠蔽すべく、口承の雰囲気のことさら現前させようと努力しているのではないのか。口承物語は乗り越えるべき対象としてでなく、まずは利用すべき模倣の対象としてあり、いささか滑稽にして素朴な語り口調も、口承性をことさら気取った結果だと思われるのである。そして口承性を装うことのうちに、口承の世界観とはまったく無縁な孤独な作者精神の所在をも認めることができよう（P87）。神田の主張は、ここに尽きている。その意味で、本書の内容は実に単純明快である。

まず第一章「偽の口承物語——無署名仮名書テキスト」では、物語文学の「はじめ」に位置付けられた『竹取物語』と、平安朝文学の「おわり」に位置してそれを締めくくる『無名草子』とを対比させ、あらかじめ本書が対象とする領域を区切って、「序」に換えている。『竹取物語』のパロディ的な性格については、すでに数多くの研究の蓄積があり、それが口承を「偽装」したテキストであることはすでに自明視されている。神田はその見方をさらに敷衍して、「始源」としての口承を冒瀆し、その不在をあからさまに指し示すテキストとしてこれをとらえる。そして、書かれたテキストによって「名」を後世に残すことにこたわりつつも、「署名」もなく「書名」もない『無名草子』から、「書かれた物語」というパラドックスを引き出してくる。

続く第二章「シニフィアンとしての海面／仮名文」では、女の文体を「偽装」する『土佐日記』をとりあげ、そこにシニフィアン（記号）の戯れを読み取る。海面のうねりとしての波や、貫之

自筆本の仮名表記の連綿体とのアナロジーから、シニフィアンとしての言葉の表層を軽やかに滑っていく船旅の味わいを、読者に充分堪能させてくれる。「日記文学」の「始源」としての「土佐日記」は、こうしてその文学史的な位置付けを脱構築される。

第三章「語りの偽再生装置」では、玉上琢弥に代表される『源氏物語』の「音読論」が徹底的に批判される。そこで実体化された「語り手」に、口承の痕跡を見いだそうとするむきもあるが、それはテクストの仕掛ける戦略なのだから、その戦略に騙されてはならないと、このように神田はいう。その主張はさらにさかのぼって『古事記』にまで及ばされ、稗田阿礼の語りからして「偽装」されたものだったと述べる。

第四章「漢文日記／口伝書説話集」では一転して漢文脈の世界を対象を求め、書かれたテクストとしての「口伝」が問題にされる。有戦故美の知識にあずかることの出来ない中原氏や高階氏などの弱小貴族が、貴人からの「口伝」を装うことで、その知識を私物化し、権威付けようと試みる。だがその上前をはねるようにして、さらに説話集が編まれてくる。屋上屋を架すようにして、次々とメタレベルへと競り上がっていく「知」をめぐる権力のいたちごっこ。それを見事に跡付けたのが、この第四章だ（ちなみに書評者は、この章が一番気に入っている）。

第五章「書かれた今様文化」では、「今様」相承の「正統」をめぐる後白河院と遊女たちの関わりを通して、その都度その都度の「声」の一回性が、書かれた「系譜」の中で固定化され、権威付けられ、さらには淘汰されていくさまが示される。書かれた

「系譜」を通して「始源」が求められてくる。だがそんなものは、後からでつちあげられた後白河院の、勝手な幻想でしかない。

最後の第六章「漢文日記の言説」では、「台記」が分析の対象に選ばれる。「台記」にみえる藤原頼長の男色行動は、「治天の君」であった鳥羽上皇のそれを模したものであった。だが、男色ネットワークを通して権力の掌握を考えた頼長は、やがてその対極に敵対者としての〈女〉を幻視しはじめる。最後には美福門院へと集約されていくその女性嫌悪が、ついには彼を破滅へと追いやる。女を徹底して排除した頼長は、その見返りに、女からの手痛いしっぺ返しを受けたのだ。

以上、ざっと見渡しただけでも、神田の主張は一貫している。ただし、第Ⅵ章だけが違っている。Ⅵ章のこの、全体のなかでの座りの悪さについて、神田は、「パロールを徹底的に排除した窮極のエクリチュールとは何か」という問題の探求でもあった（P 22）と述べている。多少言い訳めいて見えるが、裏側から攻めたということ、なんとか帳尻は合わせてある。

既存のジャンル区分を縦横無尽に横断し、越境していく、そのダイナミックな論の展開に、多くの読者は魅了されることであろう。個々の文章には、ガジェットのように多量の情報がちりちり詰め込まれており、どれもはんぱでない。情報量が多いにもかかわらず、文章はいたって分かりやすく、歯切れがよくてテンポがある。どれもこれも、根気のいる長年の努力と研鑽の裏付けを得てはじめて可能な、研ぎすまされた珠玉の文章ばかりという印象をうけた。

これで終えてもよいのだが、批判もなければ書評とはいえない。そこであえていくつかの問いを投げかけておきたい。最後のⅥ章を例外として、本書では、同じ主張が対象を違えて繰り返されている。だが、『竹取物語』と『無名草子』の間には、三百年もの時間の隔たりがある。それを同列に(共時的に)あつかってしまつてよいものか。そもそも意識的に口承を「偽装」するような行為は、過去を反省的に振り返る「歴史意識」(P 28)を前提としてはじめて可能となろう。院政期にならなければ、そうした「歴史意識」は一般化しない。神田の主張は、院政期のテキストをあつかった第四章以下では充分な説得力を持つ。だが、第一章から第三章までに遡つて、その同じ主張を当てはめるのはどうにも無理がある。とはいえ神田は、進歩史観的(P 28)な見方をあらかじめ拒否しているのだから、この批判は通じない。『竹取物語』から『無名草子』へと、対象に選ばれたテキストはたまたま年代順に並べられているけれど、その順番はどうでもよいのであつて、「偽装」のテキストの系譜は、ただひたすら無限循環を繰り返す。新たな「文学史」の可能性すらも、ここでは否定されている。なんと過激な書物であることか。

では百歩譲つて、次のような問いかけはどうか。対象として扱われるテキストは、『源氏物語』を唯一の例外として、他はすべて男によつて書かれたもの(書評者は『無名草子』の筆者も男だと考えている)である。そこでは、平安期の〈女〉のテキストが、ごっそり抜けている。しかし神田自らが、「現場主義的に十分自足し得るような場が確かにそこにはあつた」(P 10)と述べてい

るのだから、第一章から第三章にかけて対象とされたテキストを、そうした「自足し得るような場」にすえて理解することもできないわけではない。にもかかわらず、そうしないのはなぜか。その理由は、第Ⅵ章の内容とかわつてゐる。

「窮極のエクリチュール」を志向した頼長は、その対極に「女が女として自己完結し得た」(P 10)無媒介な世界を勝手に幻想し、それを激しく嫌悪した。その頼長の女性嫌悪は、そのまま本書の姿勢にも当てはまる。音声言語・口承文芸・民俗・現場主義・身体性・声・大地・自然といったロマンチックな幻想を、強迫神経症的に忌避していくその徹底したニヒリズムは、教養としての紀伝道ではなく、実学としての経学を選び取った頼長の政治的リアリズムと、どこかでつながっている。だがその頼長は、自らが排除した女に仕返しされ、破滅した。だとしたら、ニヒリズムに徹しようとする神田の姿勢それ自体が自己破産していくプロセスを、頼長を通して跡付けた、多分に自己言及的(パラドキシカル)な文章として、最後のこの第Ⅵ章を読むこともできるのだ。神田は、『書かれた物語』にパラドックスを見いだした。だが、そのパラドックスは「孤独な作者」(P 88)によつて人為的に作り出されたものであり、つまりは「偽装」されたにせよパラドックスなのであつて、だからそこには、始めつからパラドックスなどなかったのだ。

だが、神田の(「頼長の?」)一人芝居とは別に、パラドックスはあい変わらず存在する。パロールとエクリチュールとが相互換入する果てしないフィードバック作用を通して、語るように書き、

新刊紹介

上坂信男著

『源氏物語捷徑〔I〕』——光源氏の成長——

源氏物語に関する様々な本が刊行されている中で、また一つすぐれた入門書が出版された。つい最近でも、枕草子・竹取物語の研究書を世に出した著者による、源氏物語講座を本にまとめたものが、本書である。光源氏の生涯を中心として、その生き方が象徴的に表現される場面を選択、原文を掲げ、単語レベルの言葉のニュアンスまで丁寧に解説している。細かい表現への目配りから、源氏物語の本質に迫る指摘がたびたびなされており、文学作品を読む際の手本ともいえる。大部分は、

書くように語るパラドックスは次々とあらわれてくる。そのパラドックスは言語の構造の中に先験的に組み込まれており、その〈内部〉でしか生きることのできない私たちは、そのパラドックスの存在に気付くことはできても、それを解くことはできない。ましてやそのパラドックスから抜け出して、〈外部〉の高みに立つことなど、到底できはしないのだ。

「窮極のエクリチュール」を志向することでパラドックスが解けると思いあがった頼長は、最後の土壇場でパラドックスに仕返しされ自滅した。その頼長の哀れな末路を最後に記し付けて終わ

このように本文を掲載して解説を加える形式だが、重厚な解説が話し言葉で書かれているので、非常に読み易い。時代背景の説明も要を得ており、脚注では随所に図表・写真を載せて、読者の理解を助けるものとなっている。巻末に著者を含めた三氏による座談会を付す。全五巻刊行予定。第一巻のあたる本書は、桐壺巻までを収める。

(一九九九・一〇 江ノ電沿線新聞社 A5判
二七四頁 一七〇〇円)

〔門澤功成〕

上坂信男・神作光一著

『枕草子(上)』

本書は「枕草子」の全訳注である。「枕草子」の全訳注は多く刊行されているものの、「枕草子」の本文自体が諸本によって大きく異なり、いずれ

る本書は、それ自体で、極めてパラドキシカルな構造をそなえたテキストだといえよう。そのことに神田自身どれだけ気付いているのか、はなはだ疑わしい。

頼長が、そのマツチョな恋人に組みしかれ、不本意な受け身の(女の)姿勢を取られながらも、思わぬ「景味」をそこに発見していったように、パラドックスに身をまかせ、それを楽しんでいけないという法はない。藤井貞和(P89)や兵藤裕巳(P113)は、少なくともその快楽を知っている。

(一九九九・七 森話社 四六判 二五一頁 二六〇〇円)

の本によるかで読みが異なってくるという根本的な問題を含んでいるために、今まで一本を通して翻字施注したものが見られないという状況であった。そんな中で本書はもともと原本に近いと言われる三巻本、その中でも冒頭に大きな欠落のない二類本に属する弥富本を底本にして、全編を通じて翻字施注がなされた画期的なものである。

本書の形式は一段ごとに翻字がなされたうえで、その誤字脱落とそれについての新たな検討が加えられ、語釈・現代語訳、適宜余説が加えられるというものである。その内容は、細やかな現代語訳によつて一般愛好者への配慮がなされるとともに、研究者の求めにも充分応じられる、大変深いものとなっている。

(一九九九・一〇 講談社学術文庫 文庫判 四
五六頁 一三〇〇円) 〔長谷川美保〕